

---

# 宝石の魔物・ジュエル

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝石の魔物・ジュエル

### 【NZコード】

N4650A

### 【作者名】

コーリ

### 【あらすじ】

涙を宝石に変える魔物・ジュエルが、シェリーを誘拐した！ブラゴは清麿、ガッシュと共に彼女を助けに向かう！！はたして結末は？そして2人の関係に進展は！？

## 前編・涙を宝石に変える魔物（前書き）

このお話は、「金色のガッシュユー！」を題材にした小説です。お話の舞台は、石版編が集結してから少したつた設定になっています。それでは、本文にどうぞ。

## 前編・涙を宝石に変える魔物

セブンス。

ブラゴの本の持ち主、シェリーの住んでいる場所。今日シェリーは、ブラゴとの出会い記念に彼に指輪をプレゼントしようと思って、町の宝石店にココと一緒に買い物に出かけていた。ちなみに今日のシェリーは、ベルモンド家のお嬢様だと気づかれにくいよう、ピンクのノースリーブミニスカート姿だった。

۲۷

「アーヴィングに指輪をプレゼントするだなんて、シェリーもやるわね」

シリ

「あつとアラモ君、喜ぶわよ。」

シリ

「ねえアヤ、どうしてアラバの事を君づぶつあるの?」

11

「だって、彼は私の命の恩人で、あなたの命の恩人でもあるのよ？」  
彼にはいくら感謝しても足りないもの。」

シリ

「でも、ブラゴに君づけは……」

「シーリーも彼を君づけすればいいじゃない！」

シェリー

「／／／え！そ、そんな・・・／／／」

四

シリコたら、すぐ赤くなるや！！

シェリー

かひかねたしてよ

シェリーとココは、町の宝石店に着いた。

三  
四

シリ

「あ、ありがと、△△・・・じゃあこれにしおうかしぃ・・・」

シリーとココは指輪を購入して、宝石店をあとにした。

2

「じゃあ、  
私帰るわ。」

シェリー

「今日はつき合ってくれてありがとうございました。」

「」

「じゃあね、シェリー。ちやんとアリーナに寄りあがだ〜〜〜。」

そう言ひて、「」は帰つていつた。

シェリー

「〜〜〜もう、」

シェリーは赤面しながら、家に向かつて歩きだした。そのシェリーを、後ろからつけている男がいた。

シェリーは、いつもは通らぬ裏道を通りて帰つていた。

シェリー

「ブランゴに告白、か・・・。考えてみれば、魔界の王を決める戦いに最後まで勝ち進めて、戦いが終わればブランゴは魔界に帰つてしまふのよね・・・私・・・ブランゴの事を・・・つて、何赤くなつてる私！ブランゴを好きだなんて、そんな事あるわけ・・・ブランゴは、私の事をどう思つてるのかしら？ただのパートナーとして見てるようには、どうしても思えないのよね・・・」

シェリーはブランゴの事を考えていた。

シェリー

「やっぱり私、ブランゴの事が好きなの？告白した方がいいのかなあ・・・」

そんな事を考へてゐるシェリーが、気づくはずもなかつた。自分の後ろに、怪しい男が近づいてゐる事など・・・。

シェリー

「うう……！」

突然、シェリーは背後から口をハンカチで塞がれた。

シェリー

「むぐ、むぐうーー！」

シェリーは必死にもがいたが、男の握力が強く、逃げられなかつた。しかも、ハンカチには睡眠薬が仕込まれていたらしい。

シェリー

「うう・・・（ブ・・・ブラゴ・・・）」

シェリーは意識を失い、倒れ込んだ。シェリーを襲つた男は、シェリーが気絶したのを確かめると、彼女を抱えて走り去つていった。

シェリーが目を覚ましたのは、それから数時間後の事だつた。

シェリー

「ん・・・うう・・・」

シェリーは体を動かそうとしたが・・・

シェリー

「ん、んんつ・・・（か、体が動かない・・・それに、口も何かで塞がれてる！？）」

そつ、シェリーは口をガムテープで塞がれ、手足を縄でグルグル巻きに縛られていたのだ。

シェリー

「ん~、んん~!!（ダ、ダメだわ、声が出せない・・・）

シェリーは、自分の身に何が起こったのか、整理してみた。

シェリー

「（そ、そうだわ、思い出した・・・確か私、いつも通らない裏道を通つて・・・そうしたら、いきなり背後から口をハンカチで塞がれて・・・それで急に気が遠くなつて・・・）

シェリーは、自分が何者かに誘拐された事に気づいた。

シェリー

「（でも、どうして・・・？今日の私の服装は、お嬢様にはとても見えないのに・・・）

何度も言うようだが、今日のシェリーはピンクのノースリーブミニスカート姿である。

シェリー

「（だとすると、他の目的が・・・？）

？？？

「目が覚めたようだな・・・」

シェリー

「！！」

シェリーが振り向くと、1人の男と1人の少女が箱に座っていた。

男の方は人間だとわかつたが、少女の方は人間には見えなかつた。

？？？

「気分はどうだ？シェリー・ベルモンド。」

男はそう言つと、シェリーのガムテープをはがした。

シェリー

「最悪よ。」

シェリーは、男と少女をにらみつける。

？？？

「いや、ここは・・・プログのパートナーと言つた方がいいのかな  
？なあ、ジュエル。」

シェリー

「え！？」

ジュエル

「そうね。彼のパートナーだつていうわりには、少し簡単だつたけ  
どね。」

シェリー

「あなた達、何者！？」

ジュエル

「申し遅れたわね、アタシは魔物のジュエル。そして、アタシのパートナー、ザクロよ。」

シェリー

「あなた達、何の目的で私を？こんな事して、ただですむと思つてるので？」

ジュエル

「うひむさいわね…ザクロ、この子の口を塞いで。」

ザクロ

「おう。」

ジュエルにザクロと呼ばれた男は、シェリーの口にガムテープを貼つた。

シェリー

「ん~、んん~・・・」

ジュエル

「さて、本題に入りましょーか。アタシ達があなたを誘拐した目的は、あなたのパートナー、ブラ「」を呼び出して倒す事・・・そして、彼を失った時にあなたが流す涙を手に入れる事。」

ジュエル

「！？」

「アタシには呪文以外に元々持っている能力があつてね……涙を宝石に変える力があるのよ。」

そう言つと、ジュエルはシェリーに歩み寄つた。

ジュエル

「最愛のパートナーを失う時、その人はそれをとても悲しむ。その涙を宝石に変えれば、これ以上キレイな宝石はないのよ。あなたには悪いけど、ブラゴは倒させてもらつわ。」

シェリー

「（そ、そんなあ……）うつ、うつ……」

シェリーは涙を流した。その涙を、ジュエルは宝石に変えた。

ジュエル

「あら、やつぱりキレイだわ！この調子なら、もっとキレイな宝石が手に入るわね。さ、ザクロ。彼女の家に電話をかけて。」

ザクロ

「はい。」

ザクロは電話をかけ始めた。

シェリー

「ん~、ん~……（ブラゴ……助けて……！）」

それから数時間後……

華

「清麿ーお姫さーよーーー。」

清麿

「はーい。」

ガツシユ

「清麿、お姫さんなのか?」

清麿

「ああ、誰だるー?..ティオと恵さんかな?..ウマ、ロンとサンビームさんかな?まさか、フォルコレ達やウォンレイ達じや。。。。」

ガツシユ

「こへらなんでも外国からはるばる来るとは思えんがの?..」

ところが、そのままかだったのだ。玄関に立っていたのは、ブラゴ  
だった。。。

ガツシユ

「ブ、ブ、ブ。。」

ブラゴ

「ガツシユ、久しぶりだな。」

ガツシユ

「ブリーーー。」

ガッシュのボケ発言に、ブライと清麿はすつこけた。

清麿

「ガッシュ、ブリジィなくてブライだろ・・・」

ガッシュ

「あ、本当なのだ。」

清麿

「で、ブライ。日本まではるばる何しに来たんだ?」

ブライ

「実は・・・」

清麿とガッシュは、ブライを部屋に案内した。

華

「清麿ー、ブライ君に何か出そうかー?」

ブライ

「あ、じゃあコーヒーをお願いします。」

華

「清麿もコーヒーでいいわね?」

ガッシュ

「私はアイスがいいのだ!」

ブライはコーヒーを飲みながら、今日来た理由を話し始めた。話が終わった瞬間、清麿とガッシュは叫び声をあげた。

清麿

「な、なんだつてーーー！」

ガツシユ

「ショリーが誘拐されたーーー!?」

ブラゴ

「あ、ああ・・・」

ブラゴはうつむいている。

清麿

「それで、家に身代金の要求とかなかつたのか？」

ブラゴ

「それが、なぜかそういう要求じやなかつたんだ。犯人は、なぜかオレにある倉庫まで来い、とだけ電話してきたんだ。それにどうやら、オレが魔物だという事も知つてゐるみたいだつた・・・」

清麿

「まちがいないーーー誘拐犯は魔物とそのパートナーだーーー！」

ガツシユ

「うぬう・・・」

清麿

「それで、ソイツ何か言つてなかつたか？」

「 ブラゴ」

「ああ・・・確かにシエリーの涙が宝石になるとかどうとか・・・」

清磨

「涙を宝石に・・・? そんな魔物がいるのか?」

「 ブラゴ」

「ああ・・・たぶん、それはジュエルの事だろ?・・・」

清磨

「 ジュエル?」

「 ブラゴ」

「 王族の1人で、両親が有名な宝石職人の女の魔物だ。オレも子供の頃、何度かアイツの宝石店に行つた事がある・・・」

清磨

「なるほど、敵の目的がなんとなくわかった。たぶんソイツらは、ブラゴを倒す事で、シエリーが流すであろう涙を手に入れて、それを宝石に変えようとしているんだ・・・」

「 ブラゴ」

「 な、何!?」

清磨

「 それならば、ヤツらがシエリーの家に身代金を要求しなかったのも納得がいく。アイツらの目的は、初めからオマエを倒す事なんだからな・・・」

「 ブラゴ」

「 それで、頼みがあるんだが・・・」

「 清麿」

「 わかつてゐ。一緒にシェリーを助けに行つてほしいんだろ?」

「 ガツシユ」

「 うぬ!私達も協力するのだ!!」

「 ブラゴ」

「 清麿・・・ガツシユ・・・ありがとつ・・・」

「 清麿」

「 それで、倉庫とはどこにある?」

「 ブラゴ」

「 セーヌ街の第一倉庫らしい。」

「 清麿」

「 よし!待つてろよ、シェリー!!必ず助けてやるからなーー!」

## 前編・涙を宝石に変える魔物（後書き）

シェリーを助けるため、ブラゴがガツシユと共に向かいます！はたしてジュエルの実力は！？次回は「後編・宝石よりも大切なもの」です。

ガツシユ「うぬう、早くシェリーを助け出さねば！」

シェリー「ブラゴー！助けてーーー！」

ブラゴ「シェリー、待つてるよーーー！」

清磨「それより、後編にはジュエルって子の呪文集がオマケにつくらしいぞ。」

ガツシユ「それは豪華だのう・・・・」

清磨・ガツシユ・ブラゴ・シェリー「それでは、後編をお楽しみにーーー！」

## 後編・宝石よりも大切なものの（前書き）

後編です。ブライアンのオリジナル呪文が登場します。オマケには、ジユエルの呪文集もついてます。それでは、本文へどうぞ。

## 後編・宝石よりも大切なものの

謎の魔物に誘拐されたシェリーを助けるため、ブラゴはガッシュ、清磨を連れてセーヌ街の第一倉庫に向かっていた。もちろん、2人とも本を持った状態である。

清磨

「準備はいいか? ガッシュ、ブラゴ! -!」

ガッシュ

「うぬ! -!」

ブラゴ

「もちろんだ! -!」

清磨

「さあ、来たぞ! -! 謎の魔物よ! -! シェリーを出せ! -!」

清磨が叫ぶと、倉庫からジュエルとザクロが現れた。ザクロの手には、シェリーが抱えられている。

シェリー

「ブ、ブラゴ! -!」

ブラゴ

「シェリー! -!」

ジュエル

「ザクロ、彼女を放してあげて。」

ザクロ

「わかりました。おらよーー！」

ザクロはシェリーを「ラゴ」の方に押し出した。

シェリー

「キヤー！」

ラゴ

「シェリーー！」

ラゴはシェリーの縄をほどき、彼女に本を渡した。

ラゴ

「シェリー、大丈夫か？」

シェリー

「ええーー清麿君とガツシユ君もありがとーー！」

清麿

「いぐぞガツシユ、ラゴ、シェリーーー！」

ガツシユ

「うぬーーー！」

ラゴ

「ああーーー！」

シェリー

「ええ！！」

清磨

「さあ、こい！！」

ジュエル

「フ・・・さあ、ザクロ、思う存分暴れなさい！！」

ザクロ

「ああ・・・いくぞ・・・」

清磨達は、覚悟を決めて身構えた。

ジュエルの両腕から氷の円盤が飛び出した。

ザクロはクリスホワイトの本を開き、呪文を唱えた。

ザクロ

「エルセム・ティアルドン！！」

円盤が高速回転を始め、7つに分裂し、その間から巨大なビームが放たれた。

巨大なビームが、ガッシュュ達に向かってきた。

シェリー

「アッ、いきなりあんな呪文を！？」

清麿

「シェリー、ブラゴ、下がれ！」

シェリーとブラゴが後ろに下がった。

清麿

「ラシルド！！」

ガツシユはラシルドを放った。しかし、ラシルドにヒビが入り始める。

ブラゴ

「いかん、ラシルドにヒビが！！」

清麿

「ザグルゼム！…ザグルゼム！…」

ガツシユが放ったザグルゼム<sup>2</sup>発が、ラシルドに当たり、ラシルドを強化した。しかし、まだヒビが入る。

清麿

「ザグルゼム！…」

ザグルゼムが3発たまつたラシルドは、巨大化してエルセム・ティアルドンを跳ね返した。

ブラゴ

「おお、ザグルゼムで強化したラシルドが、あの最大呪文をハネ返した！…」

ジュエル

「へえ、あなた達、おもしろい術を持つてるわね？だけど・・・ザクロー！」

ザクロ

「ディゴウ・シルティアーー！」

ジュエルが放つたディゴウ・シルティアは、ハネ返ってきたエルセム・ティアルドンをハネ飛ばした。

ジュエル

「フフフ、そのザグルゼムつて術、力をためる能力があるのね。だけど、アタシの最大級の盾は壊せないようね？」

清麿

「よし、ガッシュ、ブラン、そのまま突っ込むんだーー！」

シェリー

「相手は今、強力な呪文の連発で心の力をかなり失つてるー大きな術の反撃はないわーー！」

ガッシュ・ブラン

「おおおおーー！」

ガッシュとブランは、ジュエルに突っ込んだ。

ジュエル

「へえ、さすがね。でも、アタシの素の力もなめないでよーー！」

ジュエルは、向かつてきたガッシュとブランの手を受け止めた。

清麿

「な、何！？ガツシユ、ブランゴと同等以上の腕力を！？」

シェリー

「しかも、相手にダメージを感じられないわー！」

ジユエル

「それに清麿君にシェリー、あなた達は一つよみまちがえてる！？  
アタシが考えもなしに最初から最大呪文を撃つたと思ってるの？ザ  
クロ！」

ザクロは、注射器のような物を取り出した。

ザクロ

「教えてやろ、宝石の栄養液だ。涙を宝石に変えた物を、ジユエルがさらに加工した液。体力はもちろん、心の力もすぐに戻る。」

ザクロは注射器を首に突き刺し、本に手を添えた。本は再び光りだした。

コオオオオオー！！

清麿

「い、いかんーー！」

シェリー

「ブランゴ、ガツシユ君、逃げてーー！」

ザクロ

「ゴウティアルーー！」

ジユエルの攻撃が2人を襲う。

ガッシュ・ブラゴ

「ぐあああああ！」

ジユエル

「一気にたたむわよ、ザクロ！」

ザクロ

「ギガノ・ティアル！！」

シェリー

「アイアン・グラビレイ！」

ザクロ

「ティアルセン！ティアルガ！！」

ジユエルは呪文を連発する。

シェリー

「オルガ・レイス！！」

ブラゴのオルガ・レイスが、2つの呪文を破壊した。しかし・・・

ザクロ

「オルガ・ティアル！！」

ジユエルは、ブラゴのオルガ・レイスと同じような術を放ち、相殺した。

清麿

「ガッシュ、ひるむな！ザケルガ！！！」

ガッシュはザケルガを放つた。

ザクロ

「シリティア！！」

ジュエルの盾が、ガッシュの術を防いだ。

ザクロ

「ロンド・ティアル！！」

氷のムチが、ガッシュを攻撃した。

ブラゴ

「シェリー！！」

シェリー

「リオル・レイス！！」

ブラゴは術を放つ。

ジュエル

「フン、ムダよお！！」

ザクロ

「リオル・ティアルガ！！」

ジュエルの強力な術が、ブラゴを吹っ飛ばす。

ブラゴ

「ぐあああーー！」

ジユエル

「ザクロー・じんじん撃ちなさいーー！」

ザクロ

「カービング・ティアルーー！」

円盤が回転し、ビームが放たれた。

清麿

「ラシルドーー！ザグルゼムーー！ザケルガーー！」

ガッシュは次々に術を発射した。

ジユエル

「ザクロー！ひるむなーー！」

ザクロ

「テオティアルーー！」

ジユエルが上空から氷の雨を降らせた。

清麿・ガッシュ

「ぐああああーー！」

ブラゴ

「ガッシューー！」

シェリー

「清麿君ーー！」

ガツシユ

「何をしておる、ブランゴーーー！」

清麿

「オレ達にかまうな、シェリーーーー！」

ブランゴ

「くつ・・・」

シェリー

「ティオガ・グラビドンーーー！」

ブランゴの最大呪文が放たれた。しかし、ジュエルは余裕の表情をしている。

ジュエル

「ザクロー！」

ザクロ

「ジャウロ・ティアルガーーーー！」

無数のティアルガが、ブランゴのティオガ・グラビドンを止めた。

ブランゴ

「な、何！？」

シェリー

「ブランゴのティオガ・グラビドンを止めたのーーー？」

ジュエル

「まだまだ心の力に余裕はあるわね、ザクロ。」

ザクロ

「ああ、回復液もペットボトルに入れてあるし、まだ小技も少し残つてゐる。いつものやり方だろ？相手を極限まで追いつめるん？おつと、何やひやしひが相談を始めたようだぜ。」

清磨

「ガッシュュ、ブリゴ、シエリー、聞いてくれ。おそらくアイシ、やはり、特殊な回復液を持つてゐるようだ。つまり、小技を当てるもたいしたダメージにはならん。」

シエリー

「つまり、彼らを倒すには、中級技で少しづつ追い詰めていけばいいのね？」

清磨

「ああ、任せられるか、ブリゴ、シエリー？」

ブリゴ

「ああ、任せてくれ。ちょうど、オレの新しい呪文も出たようだ・・・・・・」

シエリー

「え？」

「オオオオオオ！！

ブリゴの本が光りだした。

シエリー

「新しい呪文が・・・出でる・・・防御系の術みたいね・・・・・」

ブリゴ

「そりか・・・ではいこつ！」

ジュエル

「相談は終わった？」ちらもいかせてもらひつわ。ザクロ。

ザクロ

「ティアルセン！！」

シェリー

「キガノ・レイス！！」

ザクロ

「オルディ・ティアル！！」

清麿

「ラシルド！！ザグルゼム！！」

攻防戦は続く。

ザクロ

「バーガス・ティアルガン！！」

シェリー

「ビドム・グラビレイ！！」

ジュエルが放つた四方八方からの攻撃を、空中の敵をも叩き落とす  
ブラゴのビドム・グラビレイが相殺した。

ザクロ

「ジュエル！今まで心の力がなくなつた！！」

ジュエル

「慌てないで、まだ回復液はたくさんあるわーさあ、飲んでー」  
ザクロは回復液を飲み、再び心の力を回復した。

ジュエル

「さあ、ヤツらをまとめて吹っ飛ばすわよ。ザクローー！」

ザクロ

「ディオ・ティアルガーー！」

ジュエルが巨大な氷弾を放った。

ブラゴ

「いけ、ショリーーー！」

シェリー

「ディゴウ・グラビシルーーー！」

ブラゴの新呪文は、超巨大な盾だった。その盾が、ジュエルのディオ・ティアルガを受け止める。

ジュエル

「消し飛んだか？」

ジュエルは勝ったと思った。しかし、その時・・・

清麿

「ザグルゼムーーーザグルゼムーーー」

ジュエル

バギュウ！！バギュウウ！！

突然飛んできたザグルゼム2発に、ジュエルは避けきれずまともに

清磨

「よし、ザグルゼムも2発当たつた！！」

## シェリー

「あとは、とどめのバオウ・ザケルがね！！」

ジュエル

「くそおお、ナメるな！！力はこっちが勝つてんのよ！！サケ口！  
！最大呪文よ！！！」

ザク口

「エルセム・ティアルドン！――！」

ジユエルは再び、エルセム・ティアルドンを放つた。

清磨

「バオウ・ザケルガ！！！」

清麿もバオウ・ザケルガを唱え、2つの術は激突したが・・・

ジユエル

「その程度の術で、アタシの最大呪文を破れると思うなー！」

ガッシュのバオウは、ジュエルの最大呪文に押されている。

ジュエル

「勝った！！」

ブ  
ラ  
ゴ

「まだ負けじやない！ シエリーーーー！」

シリ

「バベルガ・グラビドン！！！」

シェリーが唱えたブラゴの強力な術が、バオウを押しとどめた。その時、バオウが黒く変化した。

清磨・シード

こには・・・」

ガッショ・アテエ

黒い・・・・・ハオウ・サケ川力・・・・・

黒く変化したバオウ・ザケルガは、ジュエルのエルセム・ティアルドンを撃ち破り、ジュエルに向かつてきました。

「くつ・・・なんて、パワーなの・・・」

黒いバオウ・ザケルガは、ジュエルとザク口を押しつぶした。

ジュエル

数秒後、そこには心の力を出し尽くした清麿、シェリー、ガッシュ、  
ブラゴがいた。ジュエルの本は、火がついて燃えだしていた。

メラメラメラメラ・・・。

ジュエル

「ハア・・・。あなた達、やるじゃない・・・アタシの負けよ。」

ザクロ

「ジュエル！ いかないでくれ！ オレはこれからどうすればいい！ ？  
オレはオマエのおかげで、大富豪になれたんだぞ！ ！」

ジュエル

「ザクロ、平氣よ。この、あなたの涙から作った最後の宝石・・・  
これを売れば、大丈夫だわ・・・ガッシュ、ブラゴ・・・あなた達  
には、これを・・・」

ガッシュ・ブラゴ

「これは・・・？」

ジュエル

「それは、シェリーの涙から作った宝石の指輪よ。これから先の戦  
いで、あなた達がくじけそうになつたら、その指輪をはめるといい  
わ。その指輪は、どんな困難も乗り越える、最高のお守りよ・・・」

清麿

「ありがとう、ジュエル。」

ジュエル

「じゃあね、ザクロ。さよなら……」

ショウウウウウウウウ・・・・。

本は燃え尽き、ジュエルは消滅した・・・。

その後、清麿達の通報で、ザクロはシェリー誘拐の罪で逮捕された。だが、4人はジュエルの事については伝えなかつた・・・。

清麿

「あのザクロって人、ジュエルの事が好きだつたんだろうな・・・」

シェリー

「ええ、おそらくね・・・」

数日後、ブランコはシェリーから指輪をもらい、少し苦笑いを浮かべていた・・・。

呪文集

ジュエル

ティアルセン・2つの円盤を重ね合わせ氷弾を放つ。

ティアルガ - 回転を加え、貫通力を増したティアルセンを放つ。

ゴウティアル・ティアルガの強化系。

シルティア - 氷による盾を放つ。

テオティアル - 空から氷の雨を落とす。

ギガノ・ティアル・ゴウティアルの強化系。

カービング・ティアル・円盤を回転させ間からビームを発射。

ロンド・ティアル・円盤の先端から氷のムチを放つ。

リオル・ティアルガ・円盤から氷を放つ。

オルガ・ティアル・ティアルガを絡ませて攻撃。

オルディ・ティアル・敵を追尾する氷弾を放つ。

ディオ・ティアルガ・円盤から巨大氷弾を放つ。

ディゴウ・シルティア・シルティアを強化した巨大な氷の盾を放つ。

バーガス・ティアルガン・四方八方から氷のやりを放つ。  
ジャウロ・ティアルガ・無数のティアルガを放つ。

エルセム・ティアルドン・円盤を高速回転させ巨大ビームを放射。

## ブラゴの新呪文

ディゴウ・グラビシル・小説オリジナル呪文。巨大な重力の盾が、  
強力な攻撃を防ぐ。

黒いバオウ・ザケルガ・異世界編の最後にも登場した、ガッシュと  
ブラゴの合わせ技。ガッシュのバオウ・ザケルガと、ブラゴのバベ  
ルガ・グラビドンが組み合わさって、初めて発動する。

やつと終わりました。このお話は、石版編が終わって、異世界編も終わつて少したつた設定になつてます。お楽しみいただけましたでしょうか。感想もぜひ送つてください。新たな小説執筆のはげみになるので。

ガツシユ「終わつたのだ・・・」

清麿「しかし、ガツシユとブリガツて相性いいんじやないの？」

シェリー「原作でも仲間になれたらいのになあ・・・」

ブリガツ「おおお、少年サンデーをチラックしてたらオレ達出てたぞ。」

シェリー「カソ!？」

ブリガツ「ウソなんか言つかよ・・・」

清麿「では、この辺で・・・」

清麿・ガツシユ・ブリガツ・シェリー「ありがとうございました!!--」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4650a/>

---

宝石の魔物・ジュエル

2010年10月9日23時26分発行